

# 日本記者クラブ会報

第397号  
2003年  
(平成15年)  
3月10日発行

〒100-0001  
東京都千代田区幸町二ノ二ノ一  
日本プレスセンタービル  
◎社団法人 日本記者クラブ

## 威厳と自信のカルザイ大統領

### 好評のシリーズ研究会「北朝鮮」



北村副理事長からポールベンを贈られ、大統領は「アリガトゴザイマス」と日本語で(2・21)

二月ともなれば、春の兆しととも

に各国首脳ゲストのクラブ来訪でにぎわうものですが、ここ数年、様子が変わってきました。二月中にお招きできた外国からのお客様は、カルザイ・アフガニスタン大統領一人だけ。大使館主催で行わ

れた「日本におけるトルコ年」オ

ープニング会見のヤルチュンバユル副首相を含めても二件です。各国首脳の来日そのものが減少したためとはいえ、日本の存在感が薄くなった証拠でしょうか。外国メディアの日本からの撤退も報じられる昨今です。どこを向いても悲観論ばかり。日本の魅力

を計る尺度が、こんなところにも現れているとすれば、寂しい限りです。

カルザイ大統領は昨年一月に続いて二度目です。アフガン支援首相特別代表の緒方貞子さんも飛び入り参加するなか、大統領は復興の成果を丁

寧にわかりやすく説明。威厳と自信を示す、熱のこもったやりとりで会場を沸かせました。

その一つ、小泉首相も関心を示した「デノミ」を「わずか三カ月で成功させた」と胸を張ったこと。

悲観論に萎縮しては、突破口は開けない―ことを、カルザイ大統領に改めて教わった気がします。

ほかに、国内のゲストは井戸敏三・兵庫県知事、研究会「北朝鮮④」武貞秀士・防衛研究所主任研究官、山口信夫・日商會頭、菅直人・民主党代表―の四人。いずれも内容のある記者会見が続きまし

たが、特に武貞さんの北朝鮮に対する冷静な分析情報に、キラリと光るものを感じました。

武貞さんは、弾道ミサイル・テポドン2が今年中に発射される可能性をにおわせ、仮に東京が標的になった場合「核弾頭が搭載されれば数十万人の規模」「天然

痘など生物・化学兵器であれば東京都民の三分の一から四分の一が死滅しかねない」と、その脅威拡大に懸念を示したのです。折もあろうに北朝鮮は、小泉首相訪韓中の、盧武鉉大統領就任式というタイミングで、ミサイルを日本海に撃ち込んだのですから、一瞬ハッとさせられました。

この研究会、毎回百―二百人の参加者で盛り上がり、好評です。三月からは、重大局面を迎えた「イラク問題」の研究会も、併せて始まります。ご期待ください。

### 電中研が法賛で新入会

新しく法人賛助会員に、財団法人電力中央研究所が入会しました。設立は一九五一年。五〇年代は「三種の神器」の出現で電力需要が増大し、神武・岩戸景気に沸いた高度経済成長期でした。電力の鬼と言われた松永安左エ門さんが創設にかかわり、自ら理事長を務めた歴史と伝統のある、わが国電気事業の中央研究機関です。法賛会員は、電中研で現在、七十八社です。(専務理事 那部吉止)

ク ラ ブ ゲ ス ト

井戸 敏三 兵庫県知事



2.4 (火) 昼食会  
司会 川戸恵子委員  
神志名泰裕委員  
出席 76人

▼「一点突破」で挑戦する

「六百万県民がよく頑張ってきた」。井戸知事は力を込めた。六千四百人もの死者を出した大震災から満八年。被災家族とメモリアルウォークを歩み、感慨新たなのだろう。「近づく東海地震のお役に立ちたい」「防災のベテランを日本各地へ、アジアへ派遣する」と熱っぽい。特に強調したのが「経済の再生」。兵庫県は「先端医療」「国際立地」など、特区的な集中展開をやっている。この中には、世界一の大型放射光施設の設置で、「ナノ社会」を切り開くトライもある。「特区」は、実は井戸知事が先行提案した「エンタープライズ・ゾーン」の日本語訳だそう。また「一点突破」と名づけて、中小企業群の活性化に汗をか

いている。阪神地区の中小企業が、新技術で世界にシェアを伸ばしている。

道州制については、「国が外交・国防・通貨などを残して、残り全部を任せてくれれば、生き生きとした日本をつくれる」と力説した。四月の統一地方選挙で「世代交代が進む」とキツパリ。最後に、「このとり」の増殖プランを聞かれて笑顔いっぱいになった。「再来年には、このとりの群れを但馬の上空に、舞わせますよ」。人と自然が共生する郷(さと)づくりを夢をはせる。

揮ごうは毛筆で「不為也 非不能也」と書いた。「できないのはやらないからだ―孟子である。「政治家デフレ」とか「ポスト小泉は小泉」などと聞く。中央政界に改革者がいないならアメリカのように知事から人材を求めればよい。石原慎太郎、北川正恭といったビッグネームに続くリーダーが台頭しているのを感じた昼食会だった。

NHKOB

尾畑 雅美

武貞 秀士 防衛研究所主任研究官



2.7 (金) 研究会  
「北朝鮮」④  
司会 春名幹男委員  
出席 165人

▼年内にテポドン2発射か

軍事インテリジェンスがかかわるテーマだけに、武貞レクチャーには独特の言い回しがつきまといつた。つまり具体的な事実や情報への直接言及より、推理や分析の形をとったアウトプットを前面に押し出す話法である。例えば――

外交より上位にある軍事目的をもって核開発は続いていく」

「今まで北朝鮮は五年ごとに新しいミサイルを発射してきた。テポドン1を発射してから五年目になるので今年中にテポドン2を発射する可能性がある。いよいよ本土が射程内に入ってくる」

「そもそも金正日国防委員長は何を考え、彼の常識とは何かということから解答を求めていく必要がある。私は金正日さんになり切って北朝鮮の考えを説明したい。今日の講師は非常識だというなら、北朝鮮が非常識だと思っしてほしい」

そんな武貞レクチャーの主なポイントを列記する。

「次の三、六カ月、北朝鮮は『悪の枢軸』をいう米ブッシュ政権が対話の相手でないとはつきりさせ、韓国の盧政権となら同一民族同士でここまで話し合いができる」と国際社会にアピールできるような提案を出すのではないか」

今後のシナリオとして、武貞氏は

「結論を一言で先に言う」と、結局北朝鮮は核兵器開発計画を放棄しないだろう。外交の世界と切り離され、

①説得による外交的解決②朝鮮半島有事につながる軍事衝突③膠着状態の三ケースをあげた。もし本当に北朝鮮が核兵器開発計画を放棄しないなら、現に韓、米、中、ロ、日が目指している「①外交的解決」は遠のく。今回のレクチャーの結論はそういう恐ろしい話なのか。

朝日新聞編集委員

佐々木芳隆

ク ラ ブ ゲ ス ト

ハミード・カルザイ アフガニスタン暫定政府大統領



▼平和定着への試練はこれから  
トレードマークの緑と黒の縦じまのチャパン（民族衣装のガウン）を羽織って、会見場に現れたカルザイ大統領。「この一年間、私が何をしてきたのか。何ができなかったのか。そして、よりよい未来のために何をすべきなのか、語りたい」と切り出した。昨年一月の初来日以降、政権の閣僚二人が暗殺され、自身も暗殺未遂事件に遭遇した。修羅場を切り抜けてきているはずなのに、洗練された物腰は相変わらずだ。

「日本料理店はまだだが、カブールでは中国、イタリア、あらゆる料理が食べられるようになった」「一年前には、アフガンに報道機関は存在しなかった。いまカブールには百を超える新聞があり、そのほとんどが私に批判的だ」。時にユーモアも交えながら、この一年間の復興ぶりを語った。

大統領が特に力を込めたのは、児童の復学と難民の帰還に関してだ。当初の計画では百五十万人を見込んでいた児童復学は、国連の支援で約三百万人に達した。一方、難民帰還も当初予測を上回るペースで進んでおり、大統領は「アフガンは（再び）、あらゆるアフガン人の「我が家」となった」と胸を張った。

だが、「できなかったこと」への言及は具体性を欠いた。「対テロ戦争は続行中だ。散発的にテロ行為はあるが、活動は弱まっている」「（軍閥兵士の武装解除は）技術的な問題はあるが、政治的には難しいことではない。国民がそれを求めているからだ」。

イラク問題でアフガン復興への国際社会の関心が薄れる恐れについて大統領は、「最近もブッシュ米大統領から電話があり、アフガンへの関

心を減ずるつもりはないとの確約を得た」と強調。しかし「イラクとの戦争になれば、影響を受けない国はない。アフガンも例外ではない」と、懸念も口にした。

一昨年十二月、米国の後押しでアフガンのニューリーダーとしてさつそうと登場したカルザイ氏。だがアフガンの「平和の回復」は、自らの力によるものではなく、米国の「テ

ロとの戦い」の副産物だ。国際社会の関心が他へ移った後で、小国の指導者としての本当の苦難の道が始まる。そんなことを感じさせる記者会見でもあった。

毎日新聞外信部

西尾 英之

山口 信夫 日本商工会議所会頭

▼「遅咲き」財界人の気概

日商會頭就任一年七カ月で、記者クラブ会見に初登場。永野重雄、五島昇、石川六郎各氏ら歴代名物會頭と比べ、知名度は高いと言えない。旭化成の副社長から会長に就任し、社長を経験しない希有な財界代表だからだ。

戦後三年間、極寒のシベリア抑留

生活を体験。二十七歳でやっと大学卒。それから三十二年間、旭化成の実力者、宮崎輝氏の裏方を務めた。東商副會頭在任四年弱で、同年齡の稲葉興作氏からバトンタッチ。

「何でも遅れて登場した。その分、頑張る……」と挨拶。會頭就任当初に「健康な日本の創造」をキャッチフレーズに掲げた。だが、結果は「期待に反して、日本の健康体は、デフレ病に蝕まれるばかり。中堅、中小企業は、もう息も絶え絶え……」と慨嘆しきり。

「小泉首相に代わる人がいないから、なお支持はしますが、小泉首相には今、大汗をかいてもらいたい。」



2.24(月) 昼食会  
司会 君和田正夫委員長  
永野健二委員  
出席 84人

高速度道路や郵政民営化など中長期問題も大事だが、それより目先のデフレ対策にこそ、全力を傾けてほしい」と、中小企業を守る立場から熱弁を振った。

とあって、デフレ対策は今や、日本一國で解決できない。旧来手法の中小企業対策も、莫大な財政資金を注ぎ込むだけで、所期の効果を挙げている。財界リーダーには、団体

## 菅直人 民主党代表



### ▼改革派知事とも連携

昨年九月の民主党代表選以来のゴタゴタの末、野党第一党党首に返り咲いた菅直人代表は「若い政党のためはしかにかかったことがあったが、二度かかることはない」と言い切った。ヒトケタにまで落ち込んでいた支持率も、ようやく一〇%台にのった。記者会見にあたって力強く

擁護だけの主張でなく、広く国民をも納得させる具体的なデフレ対策や国家ビジョンを示してほしかった。

「永野、五島会頭時代に習って、決起集会やデモ行進を……」という会場の催促質問に「行動で示します」ときっぱり。山口会頭が行動派財界人として光彩を放つかどうか。産経新聞OB

神原 博行

揮ごうした「政権交代」の四文字を實現できるかに注目が集まる。

国会論戦で小泉純一郎首相から「この程度の約束を守れなかったというは大したことではない」との発言を引き出し、デイベートの巧みさを見せた菅氏だが、会見では雇用に自己負担三割引き上げの凍結などを柱とした民主党の「予算案」を詳細に説明し、政権担当能力もはっきりとアピールしていた。

とはいえ、政権をとる上で逃げることはできないのが選挙の洗札だ。

菅氏はその第一弾として、四月に行われる東京都知事選に「石原慎太

郎知事と正々堂々と議論できる女性候補」を擁立する決意を示した。

また、衆院解散・総選挙について「小泉首相は一度も衆院選を戦わないで終わるのではないか。新総理のもと、十二月に解散になる可能性が高い」と大胆に予測し、野党の選挙協力による過半数の確保に自信をのぞかせた。

「野党結集は」二党、三党の間で成るものではなく、もっと大きなうねりが必要だ。元気のいい知事さんの動きが一つの大きな要素だ」

宮城県の浅野史郎知事や長野県の田中康夫知事ら。改革派知事との連携による「分権連邦国家」論を熱っぽく語った菅氏。永田町の論理だけで政権交代を實現できるほど甘くない。そうわきままえているようだ。政党離れが進み、国会議員の首長転出がトレンドになりつつある中、新しい政党像を示して国民の心を引き付けることができるだろうか。

産経新聞政治部

加納 宏幸

2・26(水)記者会見 司会 菅沼堅吾委員 出席 田人

### 記者会見出席の申し込みを

クラブの記者会見、研究会に参加される場合は、会場や資料の準備の都合がありますので、必ず事前に事務局へお申し込みください。最近、お申し込み人数の二倍から三倍近くの方が当日お越しになったため、会見開始後にイスを足したり資料を追加コピーしたりするなど、不自由をおかけしてしまうケースが多くなっています。またキャンセルや時間変更などが生じた場合、お申し込みがないと連絡することができません。皆さんのご協力をお願いします。

### 試写会の記事を事務局へ

今月も十七日に「ぶりてい・ウーマン」の試写会が予定されていますが、クラブの試写会は配給会社の好意で、無料でフィルムを借りています。タウン紙、ミニコミ紙などで記事にされた場合もぜひ事務局にコピーをお送りください。配給会社の担当者にもお渡ししたいと思えます。試写会はビジターとともにおたのしみいただけるようにしていますが、こちらも会場設営の準備がありますので、事前に人数をお知らせ願います。

# 試写会「ブローケン・ウイング」

## 現代イスラエルの心象風景

高木 規矩郎

「イスラエル社会のストレスを描き出す」。日本記者クラブでの「ブローケン・ウイング」の試写会後にイツハク・リオール駐日イスラエル大使が語った言葉が、心の片隅にあった「疑問」を解決してくれた。

記者クラブで公開されるはじめてのイスラエル映画というので、混迷化するイスラエル・パレスチナ紛争の下でイスラエル国民が現状をどのように受け止め、どのような生活をしているのかを知るドラマが見られるのではないかと期待していた。だがそこには紛争の影は表面的にはまったく見られなはいばかりか、ホロコストの生き残りもイスラエル建国を支えた移住者たちの辛苦を思い起こさせるものもなかった。

舞台はイスラエル北部の港町ハイファ。九カ月前に蜂に刺されて



試写会後、大使館からイスラエルワインが提供され、懇親会が開かれた。写真提供：リオール大使夫妻（2.12）

父親が急死したウルマン一家のドラマである。長女（マヤ）はアマチュアバンドのボーカル、双子の弟（ヤイル）はネズミの縫いぐるみを着て通学する高校生だが、登校拒否でカウンセラーに呼び出される。

小学生の弟（イドー）は高いところから飛び降りる瞬間をビデオで撮ることに生きがいを見いだ

し、妹（パール）に撮影させていたところ、誤って頭を打ち昏睡状態に陥った。助産婦の母（タフナ）と子どもたちの緊張は頂点に達する。マヤは黙って家を飛び出し才能を評価してくれたテルアビブのレコード会社に向かう。だが録音中も残された母や家族への思いが去来。録音を中断、表に飛び出した。息子の意識が戻ったことを知ったあと、マヤを探しにきた母と抱き合い、ヒッチハイクしてハイファに戻ろうとするとところで終わる。

監督のニル・ベルグマンは、六年からおもに短編を手がけ、「ブローケン・ウイング」は長編の監督デビュー作品である。見方によっては育児・教育問題で揺れる日本や世界のどこでも見られる母子どもの葛藤である。

ペイルート、カイロ特派員時代を経て二十年以上にわたり、中東情勢に触れてきた。そして今、中東症候群とでもいうべきか、何十年にもわたり、何も変わらない紛争の現実を呆然と見守るだけである。

昨春秋、久しぶりにエルサレムを訪れ、大学の研究機関のテーマの環として紛争の地における世界遺産（神殿の丘）の保護・管理の現状を見てきた。そのとき市街地のユダヤ人地域で車いすに乗った若者を何人も目撃した。かつて何度も訪れたことのあるイスラエルでは見たこともない光景であった。無表情で街の夕暮れを黙って眺めるだけの男女は、どんな過去を背負い、何を考えているのか。

映画では狂気ともいえるさまざまなストレスが描かれている。自爆テロや銃撃が描かれていなくても、そこには紛争下に生きる現代イスラエルの心象風景があった。

ストレス社会の一端をのぞいたような気がした。語らずして見事に描きだされた本質。普遍的なテーマでありながら、イスラエルの現状を鋭く描く「ブローケン・ウイング」は優れた社会派映画だと思う。

（読売新聞OB 早稲田  
大学理工総研客員教授）

## 書いた話 書かなかった話

## 沖縄返還交渉を追う

## 基地でつかまる苦い思いも

佐久間 芳夫

連で東京から取材に来たこと、沖縄における米軍基地が果たす役割は理解している、その証拠にはあらかじめ基地の取材を申し入れてあるはずだ、調べてみよう、とまくしたてた。

その主張が通じたか、やがて米四軍調整官なる軍人と琉球民政府の日本人係官がやってきた。

「どんな根拠でわれわれを拘束するのか」「立ち入り禁止地区に入ったというが、あそこにはフェンスも標識もなかった」

相手は「話し合いをするためにきてもらった」の一点張りで、どうやら時間稼ぎの様子。いかめしい顔の男が出たり入ったり、どこかとききりに連絡を取り合っているように見える。

結局、B52撮影の有無が焦点になっていったらしい。私たちはカメラの中のフィルムを提出して現

像させた。現地では一枚もシャッターを切っていないことが証明でき、ようやく「釈放」となったのである。

その間およそ七時間。本社デスクとの間で「米軍による理由なき一時拘束は問題。正式に抗議しよう」と合意したものの、記事化は考えなかった。

日米首脳会談の直前である。事態は許しがたいことだが、日米交渉に多少でも悪い影響を与えてはまずかろう。そんな判断も働いた。案の定、翌日琉球民政府に顔を出すと、取材受け入れの窓口である高官が言った。「昨夜は、国務省と国防総省が真つ向から対立したような状況でしたよ」。米側もきつと困惑したに違いない。



佐藤・ジョンソン会談は、小笠原の即時返還・沖縄の継続討議を決めて終わった。佐藤首相は「両三年以内に返還時期を決定できると胸を張ったが、「七〇年返還」

一九六七年（昭和四十二年）十一月のこと。佐藤首相とジョンソン大統領との日米首脳会談で沖縄・小笠原の施政権返還が議題となるとあって、私は現地の反響を取材すべくカメラマンとともに沖縄へ出張した。

那覇に着くと、当時北ベトナムへ渡洋爆撃を繰り返していた米戦略空軍のB52爆撃機が、台風を避けるためグアムから嘉手納基地に飛来したとのニュース。早速、地元の人に教えてもらい、基地近くの小高い丘に登ってチャンネルをうかがった。

来る途中、フェンス越しに見える

た黒ずんだ巨体もここからはほとんど見えない。早く飛んでくれなものか。ものの十分ほど経過しただろうか。下の道路にパトローラーカーが止まり、降りてきたMPと琉球警察の警官が手招きしている。

「あなた方は何をしているのか。ここは基地の一部である。撮影はもちろん、立ち止まってもいけない」と告げるなり、抗弁する私たちを引っ立てるようにして基地内に「連行」していった。

はじめ戦略空軍の犯罪調査部とおぼしき不気味な部屋に入れられた私たちは、日米首脳会談の関

を掲げて復帰運動を展開してきた  
沖繩の人々の落胆振りは相当なもの  
だった。

「日本がベトナム戦争に理解を  
示している限り、沖繩問題が動く  
ことはない」とはき捨てるように  
言ったのは、社会大衆党の安里積  
千代党首。沖繩がベトナム戦の出  
撃拠点であり、巨大な兵器廠と化  
していた当時としては無理からぬ  
発言だった。

そうした状況の中で、松岡政保  
琉球政府主席がもらした言葉は忘  
れられない。  
「いろいろ問題は残っているにせ  
よ、長い長い夜がやっと明け始め  
た、といった感じですよ」



後年、様々な資料が発表され、  
沖繩返還交渉の経緯が徐々に明る  
みに出てきた。

『佐藤栄作日記』『楠田實日記』  
『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』  
（若泉敬著）などを読むと、当時  
“密使”の役割を担って東京とワ

シントンと頻りに往復していた若  
泉氏は、佐藤首相がジョンソン大  
統領に理解を示し、安全保障上の  
日本の決意と努力を表明すれば、  
返還について基本合意ができると  
の感触を得たのだろう。首相への  
報告の後は「両三年内の返還時期  
合意」取り付けに全力を注ぐこと  
になる。

那覇にいて、発表された共同声  
明を読んだ私の率直な感想は、「長  
いわりには双方の主張のすれ違い  
だな」というところだったか。舞  
台裏の動きなど知る由もない。

ましてやさまざまな交渉の過程  
で米側が、沖繩基地の自由使用を  
確実に保証する取り決めを持ち出  
したり、「核の有事持込み」「B  
52の寄港承認」などをテーマに  
掲げたりしたことは、後になって  
報道で知った。

沖繩の基地内で取材している  
と、米兵の多くは基地の自由使用  
を謳歌していた。「キーストーン・  
オブ・ザ・パシフィック（太平洋  
の要石）」と彼らが呼ぶ沖繩を

手放す気などこれっぽっちもない  
ことに、憤りすら覚えたものだが、  
米側のこだわりが返還交渉にも反  
映していたのだろう。

私は、二年後の一九六九年、  
愛知外相の訪米に同行して取材し  
た。このときの最大のテーマは返  
還後の基地の態様、特に核の有無  
であったが、外相は日本側の安全  
保障への積極的な姿勢を強調する  
ことによって、「核抜き本上並み」  
を取り付けることに成功した。

この交渉も、一つのヤマであつ  
たように思うが、今にして考えれ  
ば一九六七年十一月の佐藤・ジョ  
ンソン会談が沖繩返還の天王山だ  
つたのではなかったか。

首相就任直後沖繩入りし、「沖  
繩の祖国復帰が実現しない限り、  
戦後は終わらない」と宣言した佐  
藤首相のことである。首脳会談に  
は全精力を傾注したに違いない。  
会談を終えた日の日記には「も  
ともと毀誉褒貶を度外視して最善  
を尽くした。出来栄えは後世史家  
の批評を待つのみ」と記している。

私にとって政治記者生活の中で  
「沖繩」は一つの大きなテーマで  
あつた。現役のうちには、がむしゃ  
らに、無我夢中で取材し、記事を  
書いてきた。それはそれで苦しく  
も楽しいものであつたが、今さま  
ざまな資料に直面すると、目から  
ウロコのような感じがしてきて、  
層層しい。

それにしても、身の危険はなか  
つたにせよ、基地周辺で拘束され  
た経験は、ホロ苦い記憶として脳  
裏に焼き付いている。



さくま・よしお 会員 一九三二年生ま  
れ 五五年産経新聞入社 政治部次長  
七六年フジテレビ取材部長 報道番組部  
長 日本工業新聞常務 産経新聞専務  
福島テレビ副社長を経て 九八年から長  
野放送社長

書いた話 書かなかつた話

ワーキング  
プレス

## 青瓦台クラブ改革で「激震」

▼平井 久志  
(共同通信ソウル支局長)

韓国の盧武鉉大統領の当選は韓国の政界の「三金時代」の終えんだけでなく、韓国社会の大きな変化の予告のようだ。金大中政権が登場した時にソウル特派員として大きな変化を目撃したが、四年ぶりにソウルへ帰って感じるのは権威主義の崩壊現象であり、権力階層への若い世代のエネルギーギッシュな進出だ。金大中政権すらが権威主義政権であったという風を感じてしまう。

もちろんこれは一つ間違えば、保守と進歩、旧世代と新世代、アナログ世代とデジタル世代など各社会集団の衝突と葛藤の激化に発展しかねない「爆弾」を内包している。また、時間の経過とともに若い世代が権威主義の衣に包まれてしまふ危険性もある。ただ、このダイナミズムは今の日本にはない。自滅や失速を恐れない韓国の魅力ではある。盧政権のマスコミ対策もこれまでの政権とは大きく異なる。かつて、盧泰愚大統領は青瓦台(韓国大統領官邸)横に「春秋館」という立派な建物をつくり、そこを記者室にした際に、外国メディアにも開放すると約束した。この約束は一度だけ守られた。盧大統領と東欧のある元首の共同会見を春秋館でやるので出席を希望する外国メディア記者も春秋館に集まると言われた。期待をして会見場に行くくと外交安保首席秘書官が出てきて「質問は許されない。両元首が出てこられたら起立、拍手するように」と求められ、両元首の盛り立て役に使われただけだった。

その後は春秋館での会見に外国メディア記者出席の機会はなかった。「文民政府」の金泳三政権、「国民の政府」の金大中政権でも変化はなかった。

しかし、盧武鉉新大統領のマスコミ対応には大きな変化が生まれている。大統領に当選しても外国報道機関のインタビュアーには応じているが、国内の有力紙、有力放送局のインタビュアーには応じていない。その代わりにインターネット新聞の「オー・マイ・ニュース」との単独会見に応じてメディア改革を訴えるなど、メディアとの関係を大きく変える姿勢を見せている。盧大統領は、この会見で「政権とマスコミの癒着関係を終わらせる」と言い切り、一部マスコミを「既得権にあぐらをかいている」と批判した。田中長野県知事もびっくりの挑戦的な姿勢だ。

盧新政権は青瓦台記者クラブを解散させる方針だ。その代わりに新聞・放送協会、記者協会、外国人記者クラブ、韓国インターネット記者協会に加入しているマスコミが一人一人を原則に記者を登録し、現在の記者室を原稿送稿室に改編するとしている。

三月中旬までに登録を終え、春秋館を改装し、六月ごろから「開放された記者室」を運営するという。プリーフィングは午前十時と午後三時に行いケーブルテレビなどで生中継するとしている。

しかし、まだ試行錯誤中で生中継二日目の二月二十六日はテレビ中継が途中で中断してしまうなど混乱もみられる。質疑応答の中継はなく、まだ「上意下達」の生中継だ。

盧政権のキャッチフレーズは「国民参加の政府」である。キャッチフレーズ通りに国民参加が実現するかどうか。一部階層の参加だけに終わってしまう危険性もある。韓国の歴代大統領はこれまでは「華麗な登場、寂しい退場」の連続でノーベル平和賞を受賞した金大中大統領も例外ではなかった。五年後の盧大統領が国民の拍手を受けて退任する最初の大統領になれるかどうかまだ分からないが、その改革へのチャレンジ精神には拍手を送りたい。

ひらい・ひさし 一九七五年入社 八九年から約三年間ソウル特派員 九五年支局長として再びソウルに 九九年から北京特派員を経て 今年一月から三度目のソウル勤務 長年の朝鮮半島報道で〇二年度ボーン・上田賞受賞 四月初めに授賞式



## ●春闘様変わり

ワーキング  
プレス

## 社会部担当は「失業中」

▼牧嶋 博子

(TBS社会部)

「私鉄ストは絶対抜け。抜けなかったらクビだ！」  
今から十二年前の九一年夏、社会部長からこう申し渡されて、私は労働省担当となった。

当時は「春闘」といえば「大手私鉄のストライキ」が取材の最大の山場。私鉄ストが「回避か突入か」「回避するとすれば何円で妥結するのか」。これを、できれば視聴者が起きている午後十一時台に「スーパー速報で他社より一秒でも早く報じること」。これが私に課せられた最大の任務だった。社会部の労働担当は、この一年に一回だけのやり直しのきかない勝負のため、に組合回りを行っていた。

さて、比べて、今年の春闘だが、一兆円利益のトヨタ自動車の組合が早々と「ベア要求断念」だ。この一報を聞いた瞬間「ああ、やっぱり」と思い、「春闘は本当に変わった」と思った。

「ストライキがない」というのは時代の流れだとしても、「ベアスアップ要求すらできない」という組合の現実、今の日本経済の現実に、本当に寂しさを感じる。私は春闘取材を'92春闘から三年間担当、その後部署が変わって離れたが、三年前に厚生省担当となり、省庁再編で労働省が合体したため、再び、二年前からこの季節だけ、「春闘取材」を行っている。組合の取材歴が十年以上に及ぶが、今年ほど「様変わり」を強く感じさせる春闘はない。何しろ組合側から「賃上げ要求」

がなく、経営側の提案から物事が始まるのだ。これでは組合側の取材を担当する社会部記者は「失業」同然だ。

現在の春闘取材とは「経営側がどのような新しい労務政策を打ち出すかをいち早く報じるもの」となり、さらにその「経営側の新方針が大抵そのまま決まっていく」。これでは経済部や産業界が活躍するばかりで、社会部担当記者の出る幕は少ない。

かつて取材した「春闘」は組合がまずベアスアップを要求し、企業トップも新しい労務政策を打ち出し、労使交渉の結果、経営側の思い通りにも組合側の思い通りにもならなかった。土壇場でひっくり返ったり、別条件が落とすところとなったり、新米記者の予想を超える結果となった。

経営側、組合側、双方からの取材結果を吟味して、落とすところを予想するのが春闘取材の醍醐味だった。電機、自動車、鉄鋼、私鉄、電力などの産別や単組、経営を回っているところ「今年の春闘賃上げの相場や落としどころ」が見通せる

ようになる。そうなる春闘の取材は面白くなり「ハマってしまふ」。そういう労働担当は多かった。

かくいう私もその一人だった。組合回りをする子持ちの女性記者など当時はほとんどいなかった。私は存在自体が珍しがられ、本場に取材先で「春闘の仕組み」を教えてもらうこととなった。

さて、先ほどの「絶対抜け！」という厳命下の'92春闘の結果はどうだったのだろうか？

なんと、朝のラッシュをまたぎ、午前十時二十分まで大手私鉄が止まるという、十一年ぶりの「大手ストライキ」となったのだ。「スト回避」の速報の出る幕はまったくなかった。そしてこれが春闘史上最後の大手私鉄ストライキとなった。ストライキに助けられ私はクビにならなかった。

「春闘」は死語になってはいないが、その中身は昔とは一変している。いつか日本経済が復活したときに「春の闘い」は労使互角の闘いとして復活するのであるか？

まきしま・ひろこ 一九八三年入社 労働省 都庁 文部省などを経て 現在 厚生労働省 キャップ

# はやて開業3カ月 新幹線効果はゆっくりと

▼玉内 洋光  
(デリー東北新聞報道部)

「早くも地元が期待していたほど  
「はやて」効果がなことが明らか  
になりました」「建設に数千億円も  
つぎ込みながら、観光地に人っ子一  
人いません」

青森県や岩手県北の住民の悲願だ  
った二〇〇二年十二月一日の東北新  
幹線盛岡―八戸間開業の興奮もさめ  
やらぬ昨年、冷水を浴びせかけるよ  
うな論調の中央のテレビ局による報  
道が相次いだ。

画面に映し出されたのは、空き地  
が目立つ八戸市の工業団地や、ウミ  
ネコの繁殖地・蕪島など市内有数の

## 八戸発



青森

観光地の閑散とした風景だった。巨  
費を投じた公共事業の無意味さを、  
したり顔で論じるスタジオの記者や  
ゲストたち。

その牽強付会(けんきょうふかい)  
には恐れ入った。不況下で企業誘致  
に頭を悩ます自治体は、何も八戸だ  
けではあるまい。渡り鳥のウミネコ  
が大挙飛来するのは三月。市民も敬  
遠する真冬の海岸の映像をいわくあ  
りげに流し、開業効果うんぬんもな  
いだろう。

だが、「北の時代の幕開け」とけ  
ん伝された新幹線にも「影」の面が  
あるのは事実。「もう一つの開業」  
といわれた並行在来線だ。盛岡―八  
戸間の延長約百八キロ分がJR東日  
本から経営分離され、青森側は青  
い森鉄道と県が、岩手側はIGR  
いわて銀河鉄道がレールと経営を引  
き継いだ。

もともと不採算路線のため、第三  
セクター二社は運賃値上げを余儀な  
くされた。青い森鉄道は普通一・三七  
倍、定期一・六五倍もの値上げ。沿線  
住民は「娘を八戸の高校に通わせる  
のに、三万円半年定期代が五万円  
にもなってしまう」と悲鳴を上げた。

特に青森側は、県が鉄道資産を取  
得し、三セクは車両運転のみという  
「上下分離方式」を採用したことから、  
会社の赤字は事実上、県費で負担す  
る仕組み。新幹線フル規格工事のつ  
けは、今後も県民に重くのしかかる。  
半面、JR関係者が「予想外」と  
驚くほど、「はやて」の首都圏から  
の利用状況は好調だ。一百万の目帰  
りツアーなどが功を奏し、前年同期  
の特急「はつかり」と比べ、盛岡―  
八戸間は五割増し。「安近短」が最  
近の旅行客の傾向だが、十和田湖で  
開かれた冬季観光イベント「十和田  
湖冬物語」は例年以上の活気。観光  
シーズン本番に向け、久しく低迷し  
ていた青森県観光のドル箱復活を予  
感させた。

中心市街地では「定住人口が増え  
る」と新幹線特需を見込み、分譲マ  
ンションの建設ラッシュが起きつつ

ある。一方、東京から三時間と通勤  
圏内に入ることで、事業所を撤退さ  
せる兆しも。民間信用調査会社は「三  
月の決算期を境に動きが出てくる」  
と読む。

八戸漁連、はちのへ漁協の大型倒  
産、イトーヨーカドー八戸店の閉店  
など市経済の見通しが立たない中、  
新幹線は唯一の明るい話題だ。しか  
し、開業効果イコール経済効果だけ  
か。記者はそうは思わない。人やモ  
ノの流れが活発化することで、市民  
の意識や文化もゆっくり醸成されて  
ゆく。やがて八戸駅が通過駅になっ  
た時、その真価が問われるのだろう。  
(たまない・ひろみつ)

### 八戸市メモ

人口 245,099人  
世帯 94,743世帯  
面積 214.04平方キロ

1871年、廢藩置縣で八戸など五県が弘前県  
と合併し青森県が誕生。青森イコール旧津軽  
藩と思われがちだが、八戸は旧南部藩。今も  
津軽への対抗意識が強い。八戸港はイカの水  
揚げ日本一を誇る。1994年に東北初の国際コ  
ンテナ定期航路を開設、国の輸入促進地域の  
指定を受ける。「春を掘り起こす」郷土芸能  
のえんぶり(2月)、華麗な人形山車の三社  
大祭(8月)は多くの観光客でにぎわう。新  
幹線開業事業で新名所の屋台村も完成した。

# 昭和基地 便り

## 36人の村から 地球環境の今を伝えたい

▼藤田 浩之  
(NHK社会部)

耳元を吹き抜ける風のほかは、何も聞こえない。潮騒さえ氷に閉ざされていく。南極は、音のない世界を体験できる場所だ。

NHK南極ハイビジョン放送センターの駐在記者として、昭和基地に赴任したのは、去年の十二月十八日。とはいっても、ハイビジョン放送センターは、まだ影も形もなく、建物とアンテナの建設が最初の仕事になった。毎朝六時半に起床して建設現場に向かう。観測隊の人たちにも助けてもらいながら、コンクリートを練り、基礎を作って放送センターの建物を建てていく。パラポラアンテナの組み立ては、一カ月あまりかかった。白夜が続く夏の南極では、時間の感覚もなくなり、気が付くと、深夜になっていることもあった。そして迎えた二月一日、南極ハイ

ビジョンセンター開局の日だ。南緯六九度、いわば「地球の底」のあたりにある昭和基地からみると、ほぼ水平線に位置する赤道上の通信衛星に向けて、電波が発せられた。電波は無事、一万四キロ離れた日本に届き、初めてのハイビジョンによる南極からの中継放送は、昭和基地の生活や珍しいペンギンの子育ての様子を伝えることができた。

それから二十日あまり、夏隊が去り、昭和基地は、本格的な越冬生活に入った。観測活動の取材もこれらが本番だ。

南極は、地球環境研究の最前線にある。今年は、大陸を覆う厚さ三千メートルの水を掘削し、氷の柱を掘り出して、そこに閉じこめられた八十万年前の大気の状態を調べるといふ計画が本格的に動き出す。そし

てオゾンホール。毎年、春になると南極上空のオゾン量がゼロになり、紫外線の量が増加する、この現象からは、地球環境の今を知る貴重なデータが収集される。

昭和基地は宇宙・地球物理学研究の拠点でもある。ここは、オーロラ現象がよく見られるオーロラ帯に属し、観測にとっては絶好の場所になっている。オーロラの解明は、地球の外側を広く覆っている磁気圏の性質を明らかにし、土星など磁気圏を持つ、ほかの惑星の解明にまでつながる研究である。地球環境や宇宙の謎に迫るべく、静寂の地で黙々と続けられる、研究・観測をどうやって取材し伝えていくか、テレビの特性を生かした、わかりやすい報道をめざしたいと思う。

それともう一つ、これから一年間の基地での共同生活も大きな取材テーマになる。昭和基地で越冬する三十六人は、生活のすべてを自分たちでまかなうため、一人一人がさまざまな「係り」を担当する。農協、漁協、レクリエーション、新聞、映画、バー、ビール工場などなど。ちなみに私は、新聞係の責任者で、

毎日A4版の新聞「JARE TIMES」(JARE=Japanese Antarctic Research Expedition=日本南極地域観測隊)を発行している。大きな事件・事故はなくても、やはり人間が住んでいる場所、毎日、様々な出来事がある。隊員が交代で記事を書き、写真を撮って新聞をつくっていくのだが、先日は、昭和基地で二例目となった虫垂炎の手術の経過を医師団の話を受けて詳しく伝えた。

この一年、人口三十六人のこの「昭和基地村」で、何が起きるのか。自分自身も当事者である、この「村」の出来事を、隊員のみなさんの豊かな表情とともに、工夫して伝えていきたいと思っている。

(ふじた・ひろゆき)

極地に長期出張する取材班に、会報委員会からお願していた「便り」の第一号が届きました。第44次観測隊とともに越冬するNHK隊は藤田記者はじめディレクター、カメラマン、技術スタッフの計五人。来年三月末の帰国まで、日本の小中学校と結ぶ「南極授業」やオーロラ、皆既日食の生中継など様々な番組を制作します。http://www.nhk.or.jp/nankyoku/index.html/アクセスすれば、放送センターと昭和基地を「探検」できます。ライブカメラで、最新の南極の画像もご覧になれます。

●トルコ年

オープニング記者発表

ことしは「日本におけるトルコ年」です。オープニング会見が、ヤルチンバユル副首相とウナイドウン駐日大使が出席して行われました(2月17、大使館主催)。



終了後行われたレセプションで会員と杯を合わせる副首相(中央) 左から二人は駐日大使

来年三月までサッカーの代表戦はじめ歴史展、美術展、コンサート、ホテルでのトルコ料理フェスティバルなど百以上のイベントが全国各地で予定されています。

しかし、緊迫するイラク情勢下での記者発表だったため、出席者の関心はもっぱらトルコが米国にどこまで協力するかにあったようです。副首相は、「トルコが直接戦争に巻き込まれることはない。戦争時に発生が想定される百万人の難民の問題を懸念しているが、われわれは平和的解決を望んでいる。いずれにしても、トルコの安全はNATOによって保障されるので、日本人のみならず人も安心して観光にきてほしい」と強調しました。

た。明治・大正・昭和それぞれの時代の雰囲気、社会風俗を伝える貴重な資料となっています。

今回の企画展は、ニュースパークが所蔵する約三千点の新聞附録の中からえりすぐった約二百七十展を展示します。期間は六月二日(月)まで(電話045-661-2040)。

「新聞附録万華鏡」おまけにみる明治・大正・昭和」展を開催中

新聞の附録は、明治期から読者サービスの一環として、大事件を描いた図版、有名人の肖像画、政治・社会風刺漫画、芝居や講談の速記、家庭で役立つ実用情報集、すころくなど多種多彩なものが作られてきまし

■会議報告■

第239回会報委員会

(2・12 小会議室)

新委員の仙石伸也新聞協会広報担当主管(旧・平野恭子氏)を紹介した後、三月号の編集方針を協議した。また四月号からの「写真回廊」の短文執筆者候補についても意見を交換した。

出席 住田委員長、小川、尾崎、仙石、中山、堀内、元田の各委員。

第318回企画委員会

(2・18 宴会場)

今後のゲストについて検討し、イラク問題をテーマに研究会を行うことを決めた。

出席 君和田委員長、清本、橋本、永野、宮田、菅沼、春名、金重、鳥居、神志名、迫田、羽生、川戸、和田、渡辺、村澤、福沢、ワグナーの各委員。

第306回会員資格委員会

(2・18 小会議室)

三月一日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 門田委員長、瀬戸、桃井、岡崎、塚越、岡元、船田、深澤の各委員。

2003年度日本記者クラブ賞推薦委員会

(2・26 大会議室)

委員長に藤原房子氏を互選、推薦のあった十一候補について意見を付して、四月三日の選考委員会に報告することにした。

出席 藤原委員長、浅井、細野、渡辺、山崎、田場の各委員。

第374回理事会(書面)

別記の理事交代を承認した。

△理事交代▽

北海道新聞社

(新) 村田 正敏 東京支社長

(旧) 村川 亘

南日本新聞社

(新) 大野 達郎 東京支社長

(旧) 二階堂圭一

△法人会員代表変更▽

新潟日報社

(新) 星野 元 代表取締役社長

(旧) 五十嵐幸雄

デイリースポーツ社

(新) 平井 隆司

取締役編集担当・東京本社代表

(旧) 軽尾 寛久

ロイタージャパン

(新) A・ディクソン 日本支局長

(旧) W・スポサト

「語り継ぐヨーロッパ  
統合の夢」クリスチーン・  
オクラン著

伴野 文夫訳 (NHKOB)  
オクラン女史はフランス

テレビのキャスターをつとめたこと  
もある評論家。カエサル征服に  
はじまり、現代の二度の大戦を経  
て、ついにユーロを創出するに至る  
までの歴史を、明快かつ簡潔な筆  
致で描いています。自分の息子に  
語りかける形で、欧州から戦争が  
なくなったのはEJ統合の結果であ  
ると説き、明日の欧州連邦の建設  
に力を尽くすよう呼びかけます。  
アジアの共生を願う私たちにも大  
いに共感できるメッセージです。

(NHK出版 一、五〇〇円)

『アイルランド夢随想』

花田 久徳 (日本新聞協会審査委  
員、日本経済新聞社友)

ケルトの残影を最も色濃く残し  
ているといわれるアイルランド。  
有名な巨石紋様や通路古墳は古代  
への夢をかきたてる。妖精の物語



は民族矜持の発露であり、  
ロマンの息吹でもある。数  
百年にわたるイギリスの圧  
政に虐げられ、ヨーロッパ  
最貧国のひとつとされたア

イルランドは今、政治的中立を堅  
持し、ヨーロッパの星、あるいは  
ケルティック・タイガーなども  
てはやされ、経済発展の道をひた  
走る。それは、大事なものを失  
かねない危うさを秘めてもいる。  
人々の心に触れながら、歴史と  
今を結ぶ幻想の回廊を歩く旅は母  
国、日本と自己を見つめ直す旅で  
もある。 (論創社 二、二〇〇円)

『自治体の地域政策』

井上 繁 (日本経済新聞OB)

分権時代に入ったのに、多くの  
地方自治体は国の政策に頼ってい  
るのが現状だ。これでは地方分権  
とは名ばかりである。首長や職員  
の発想の転換を願って、自治体が  
自ら政策を考える際のヒントをま  
とめた。記者時代、国内四カ所の  
支局で地域を定点観測し、都庁か

ら地方の市役所、町村役場まで多  
くの地方政府を取材した。それは  
今も続いている。長い間、取材の  
対象としてきた自治体や地方公務  
員への応援歌のつもりである。

(同友館 二、八〇〇円)

『アメリカの正義に惑わされるな』

山本 祐司 (毎日新聞OB)、大  
野彩子共著

いま日本が落ち込んでいる不  
況は米国の謀略の様相が濃い。

一九八五年、先進国蔵相会議で各  
国は米国の経済赤字をなくすため  
公定歩合を低くしたが、国益を考  
えたドイツは罵倒されながら離脱  
した。米国は竹下登蔵相に「日本  
は裏切らないな」と脅しの圧力を  
かけた。日本は最低の公定歩合を  
二年三カ月も続け、米国はその間  
に赤字を抜けて史上最高の好況を  
つかんだが、日本の経済はバブル  
過熱、大暴落と目茶苦茶になった。  
米国の国際謀略は多いが、ついに  
戦争を起こすから恐ろしい。

(河出書房新社 一、八〇〇円)

毎日中部本社半世紀の歩み



毎日新聞中部本社編集局長の清水  
光雄会員から、本社ビル移転を機に  
発刊した『疾風50年 駅前で刻んだ  
毎日新聞中部本社史』をご寄贈いた  
だきました。

一九五〇年、毎日新聞は戦時新聞  
統制で中断していた名古屋での印刷  
を再開しました。以来五十年間に中  
部本社がカバーしたビッグニュース  
を、当時の新聞報道をもとに紹介し  
ています。まさに「東海地方の戦後  
史」。取材した記者の「秘話」や思  
い出話も収録されています。ラウン  
ジの書棚に置いてあります。

ちなみに、これまでの駅前の毎日  
ビルは四月に取り壊しが始まり、四  
年後の二〇〇七年に「毎日・豊田共  
同ビル」として、東海地方随一の高  
さを誇る新ビルに生まれ変わるそう  
です。

◇個人D会員

## プロフィール

## ○囲碁の会 ●二月十五日(土)

例会には二十六人が参加、総対局数は四十六局でした。

白星を重ねた吉沢正也(四連勝)、石川基(三連勝)、畠山武(同)、有賀忍(同)の四氏のほか、塚本一、三ツ野充蔵、都留重人の三氏も優秀賞を獲得しました。

本年度最後の例会は三月十五日(土)午後一時から宴会場で行います。しばらくごぶさたしている皆さん、ぜひご参加ください。

## ■将棋の会 ■二月二十二日(土)

例会には、青木克之、重定尚志、林茂雄、森田昌芳、日比野和幸、和田正光、岸田功の各氏が参加しました。森田さんが五連勝し、アマ四段基準点へ三十七点に迫りました。次回は三月二十九日(土)午後一時から行います。

四月二十六日(土)には、初めての大会を開催します。各自のレーティングの持ち点をもとに、ハンデをつけて駒落ち対局とします。対局時間は最長で一時間半程度とし、トーナメント方式で行います。優勝、

準優勝者には賞品を用意します。参加費用(昼食代含む)は二千円です。初参加の方も歓迎しますので、午前十一時に小会議室へお集まりください。

## 招待券

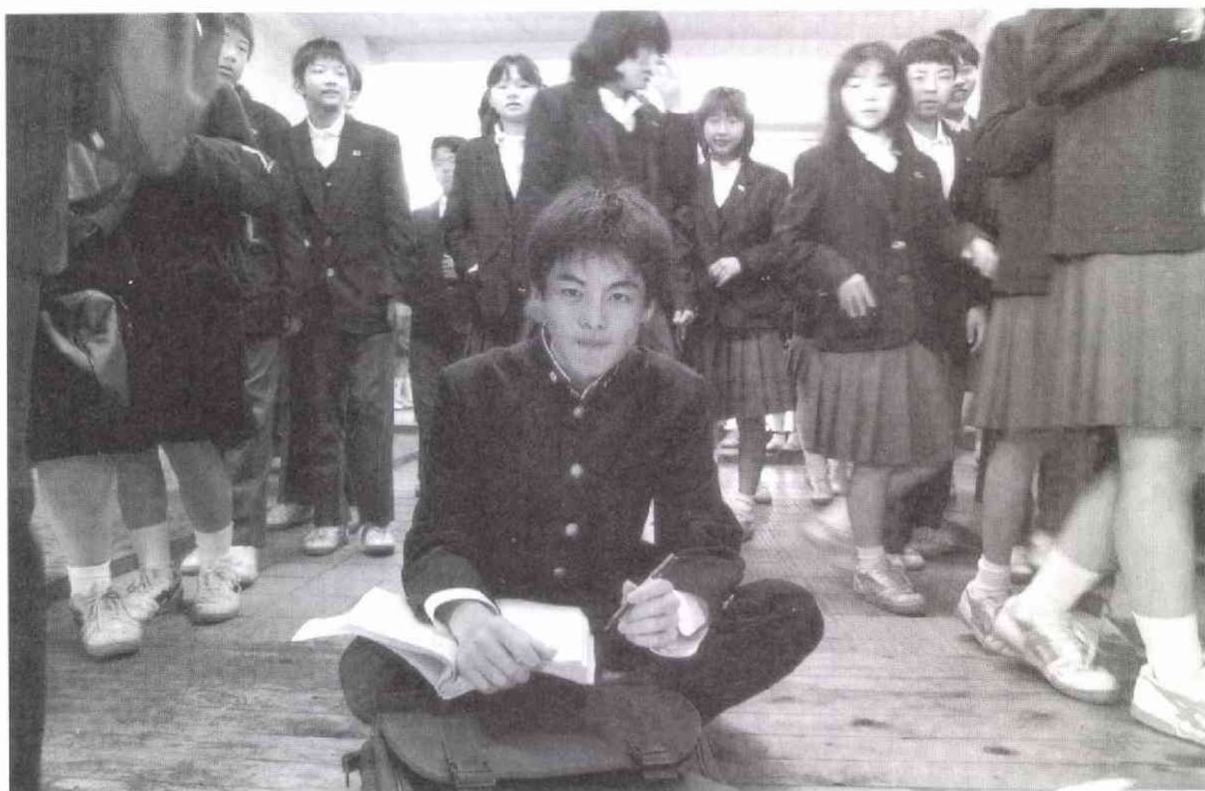
朝日新聞社から「朝日陶芸展」「輝け日本油画」「マヤ文明展」「日本近代美術展」「THE DOKAEMON展」「棟方志功展」「いわむらかずお 絵本の世界展」「クマのプーさんの世界展」、日本経済新聞社から「青木繁と近代日本のロマンティズム」の招待券を「ご贈りいただきました。お礼申し上げます。」

## クラブのロゴ入りの記念品

クラブゲストに差し上げている記念品を受付で販売しています。ネクタイ(四種類)のほか万年筆、ボールペン、シャープペン、カフス・タイピンセット(金、銀、エナメルの三種類)、ポケットチーフ(女性用)があります。プレゼントや海外取材の際のお土産としてご利用ください。

# 写真部

写真 立石 紀和 (1997年読売新聞入社 北海道支社を経て 2001年から東京本社編集局写真部)



## 制服の効用

制服の極め付きといえは軍服だが、その流れをくむ「学ラン」は日本特有のもので、欧米ではまず見かけない。そのせいか、来日する有名ミュージシャンやファッション・デザイナーには新鮮で格好よく見えるらしく、私家版「学ラン」を作らせておしゃれに着こなす人が結構いる。

「学ラン」姿で一人どっぴかり床に座っている少年が群を抜いてカッコいいので、この写真は青春映画の一コマにも見えるが、実は東京都足立区立第十三中学校の日常的情景らしい。少年のひざの上にあるのは、えんま帳。スカートが短すぎるのは、だれ？ 派手な茶髪は、だれ？ 「荒れた学校」を改革するために生徒たちが自発的に始めたチェック体制だというのが、祖父母の代と同じ手法がまだ健在とはオドロキだ。

中学時代といえは、精神的にも、肉体的にも大人と子どもの中間。急に悩みごとが増えて悶々としたり、自分自身の肉体的変化に戸惑うことも多い年ごろだ。そのすべてを制服に包み込もうとすれば、はみ出したり、こぼれ落ちそうになっても不思議はない。乱れをチェックすれば、ホームレスを襲う奴を未然に発見できるわけでもない。

それより時流に逆らう男はズボン、女はスカートという制服のスタイルやあり方を議論してみても――。

(堀江瑠璃子)

4月22日に春のゴルフコンペ

初めての方も歓迎します

ゴルフの腕前を存分に発揮する絶好の季節到来です。クラブの第81回ゴルフ会を左記のように開催します。ご夫妻での参加、初めての方も大歓迎です。

日時 四月二十二日(火) 午前八時集合  
コース 戸塚カントリー倶楽部  
会費 五千円

参加ご希望の方は、事務局の小橋(三五〇三二二七八)までご連絡ください。八組三十二人を予定しておりますので、申し込み先着順で定員になり次第締め切らせていただきます。

今月のレストラン

☆夜の部のご案内☆

和食(九階) ミニ懐石(三千円) がおすすぬ

鯡の若草焼き、ぜんまいとふきの信田巻きを中心に春の味覚をおたのしみください。前菜、刺身三点、帆立て包み揚げ、稲庭うどんに桜風味のアイスクリームもつきます。

月替わりの五千円、七千円の懐石コースには甘鯛の卸し蕪、筍挟み揚げなどがついています。予約は三五〇三二二七二三へ。

ナンバースタンドに会員証を レストランを利用される際は、テーブルの上のナンバースタンドに会員証を置くようご協力願います。

「MYBOOK MYPR」に投稿を 会員のみ皆さんの新刊書を紹介しています。自著の狙いや内容を二百字程度でおまとめいただき、事務局の本庄までお送りください。今月は13ページに掲載しました。

会員現況 法人会員 一四九社 基本会員 八二〇人 個人会員 一、七三九人 法人・個人賛助会員 七八社 二〇八人 特別賛助会員 六四人 名誉・功労会員 一二人

計 一三二七社 一、八四三人

洋食(十階) オマールエビコース(四千八百円)

カナダ南東部のノバスコシア州産のオマールエビをまるごと軽く煮込み、洋ネギのクリームソースとアメリカンソースで召し上がっていただきます。前菜二品、グリーンアスパラガスの冷製スープ、パン、コーヒー、クレープッシュゼットのデザートにグラスワインがつきます(三月十日〜六月末の期間限定。要予約)。

歓送迎会の季節にピッタリの一人五千五百円の宴会プラン(着席、飲み放題)も七月末までおためしいただけます。予約は三五〇三二二七六六へ。

クラブの電話

(ダイヤルイン)

- ・和食レストラン(9階) 3503-2723
- ・洋食レストラン(10階) 3503-2766
- ・貸室予約 3503-2724
- ・受付、宴会打ち合わせ 3503-2721
- ・クラブ行事への申し込み 3503-2722
- ・会員事務 3503-2725
- ・経理 3503-2728

三月の行事予定(4日現在)

- 12日(水) 正午〜午後2時 書馬輝夫・浜松 ホトニクス社長昼食会
  - 13日(木) 午後2時〜3時30分 シリーズ研究会「北朝鮮」⑤ 田中均外務審議官
  - 17日(月) 午後2時〜3時 ジョン・スミス GM会長記者会見
  - 20日(木) 午後2時〜3時30分 シリーズ研究会「HIV/エイズ」⑪ 加藤隆俊元WHO専門委員
- (行事案内電話) 〇三二三五〇三二七六四

会報委員会

- 委員長 住田良能
- 委員 小川津根子 尾崎美千生 仙石伸也
- 中山司朗 堀内敏宏 元田成
- 連絡 長谷川和子 本庄五月
- (電話) 〇三二三五〇三二七五二
- (FAX) 〇三二三五〇三二七二七